老と幼

気丈の父も高年につれて体の不調を訴えては、家族の関心を集めようとする。

「もう、わしは長生きしそうにない」。九十歳の父の言葉であるだけに、私は、え？　と聞き直したほどである。

「お父さん、ちゃんと長生きしているではないか」―反問するような、慰めるような私の言葉に、父は無表情のままである。

身内どうしとなると、どうしても感情が先立ってしまう。父がいうように、長生きとは本人にとってはこれから先の生であって、今まで生きてきた長さではないはずだ。うかつにもそれに気づかず、私の言い方には意地悪さがこめられていた。

父よ、赦(ゆる)して。―今朝の懺悔(ざんげ)である。

老父と孫たちを連れた四人の散歩も、近ごろはとだえがちだ。父の脚が日に日に弱くなってきた。その外にもわけがある。一年の孫娘はいう。「大おじいちゃん抜きの散歩もしようよ」。孫息子はいう。「時にはお金を持った散歩をしようよ」。父は散歩

途上だけでなく、買い食いを断固許さない。少しでも慰めようと思って、このひ孫たちとお茶を飲もうと誘ってもアウトである。孫らはそれがうらめしいのだ。

その父抜きのある日の散歩。孫が突然私に問う。「おじいちゃん、いつまで生きる？」。戸惑いながら私は答える。「うーん、大ちゃんが高校生になるまではね」。しばらく考え込んでいたが、「それは困るよ。ぼくがおじいちゃんのようになってから、一緒に天国へ行こうよ」という。孫の名は大、彼が一年生の時のことである。ああ、幾度思い出しても、熱いものがわが胸にこみあげてくるではないか。

しかし、私に問う私がある。お前は孫の言葉に酔いしれるほど潰かっているのに、お前はわが父に、一時でも同じ思いをさせたことがあるか、と。父よ、赦されよ。—今日の悔恨である。

（一九八〇年九月四日）